

「教養とは何か」を考えるために

遠藤 史

数年前から書店では、「教養」という単語をタイトルに含む書物をよく見かけるようになった。ビジネス雑誌でも「教養」関係の特集が組まれているのをしばしば目にする。目を大学関係に転じてみると、「教養」を校名に冠したり、学部名やセンター名に含ませたりする事例が近年増加傾向にある。明らかに、教養というコンセプトはこのところ注目を集めている。にもかかわらず、これらの名称に含まれている教養というものについて語ろうとするとときに直面するのは、「教養とは何か」という問いに対して直截な答えを返すことの難しさだ。これは、何故なのだろうか。

その大きな原因の1つは、教養という概念に含まれる領域の広さであろう。とりあえず対象を大学に絞って見たとしても、この状況は変わらない。大学を構成する各部局や、そこに属するメンバーや学生に、さらに進んで大学の種々の関係者に、試みに「教養とは何か」と尋ねてみれば、その答えはおそらく、かなりの多様性を示すだろう。しかしながらこのような状況は、考察の出発点としてはいささか頼りない。この状況を打開することはできないだろうか。

25♦

私はこの打開策として、教養を他の何かと対比させ、両者の違いを考えていくという方法を提案したい。その対比すべきものと教養とは、何がどのように違うのか。この点を考えることによって、教養の姿を明らかにするという方法である。これによって、幅広い領域を含む教養のコンセプトが次第に明確になっていくと考える。この方法にはさらに利点がある。まず、考察を重ねるほどに、教養に対する理解が深まり、誤解が正されていくことだ。さらに、「教養とは何か」に安直な定義を与えてしまうのを避けることによって、教養の本来的な性質の1つと考えられる「領域の広さ」を自ずと確保しうることだ。

大学という場に焦点を絞って考えるなら、「教養」と対比することが有効なのは、まずもって「専門」というコンセプトであろう。本学のカリキュラムにおいて両者が最も基本的な区分となっていることから見ても、両者を対比させることは、考察の出発点として適当だと考えられる。では、両者の違いはどのような点に求められるのだろうか。

主要な違いは3点あると思われる。第1に、すでに上でも述べたが、「教養」の含む領域は広い。これに対して、「専門」の含む領域は狭い。「専門」は明確に定義され、それゆえ限定された領域を持つことによって成立し、その内部で用いられる探求のための方法論はメンバーに共有されている。かくして「専門」は必

然的に複数個となり、実際には非常に多数の「専門」領域が成立することになる（一例として、科学研究費の申請に用いられる「系・分野・分科・細目表」を参照されたい）。これに対して、「教養」の含む領域は広く、探求のための方法論も許容範囲が広い。あれやこれやの分野に分かれた複数個の「教養」というものは存在せず、教養は非常に大きく広い、一続きの分野として存在している。

第2に、「教養」は横断的であり、これに対して「専門」は構築的である。「専門」が構築的であることは、たとえば大学の学部・学科等のカリキュラムを見ることによって確かめられる。大多数の場合それらのカリキュラムは、入門→基礎→発展→応用のような体系を取る。この体系は階層的である。入門の理解は基礎の前提であり、基礎を確実に修得することが発展や応用に進むために必須となる。これに対して、「教養」で探求に用いられる方法論は横断的である。多様な分野を経巡り、多様な分野から得られた知を、探求者自らの関心において結び合わせ、望むらくは統合していくというやり方が、「教養」の基本的な方法である。「教養」に構築的なカリキュラムを導入したり、習得段階ごとの階層を設けたりする状況があまり見られないのは、この特徴がもたらすものである。

第3に、「教養」は過程志向的であり、これに対して「専門」は結果志向的である。「教養」における探求が志向するのは何か特定の目的ではなく、探求するという過程それ自体である。その過程は探求者自らの関心に基づいて行われるから、それが結果として何か（たとえば幅広い分野にわたる知識など）をもたらすことは十分ありうるが、「教養」の眼目は本来そこではなく、むしろ遍歴の過程そのものにある。「人間になるための教育」たる教養教育の仕事は、この遍歴の過程を導き、手助けすることだ。一方、「専門」の目指す目標は明確で、その専門領域においてより高い水準の結果を得ることである。たとえば実験を行う場合、実験それ自体が目的ではなく、重要なのはその実験によって得られた結果である（得られなければ、その実験は失敗であろう）。その結果が高い水準であればあるほど、その専門領域で高い評価を得ることができるし、またその専門領域の評価も上がる。

以上のように、「教養」と「専門」を対比することによって、「教養」のコンセプトが少しずつ明らかになってくる。もっとも以上の対比がいささか単純化されていることは、ここで急いで付け加えておかなければならない。たとえば、他の領域との協力によって成長を遂げつつある専門領域もあるだろう。逆に、教養の探求の過程の中で、探求者がしばらく1つの専門領域に沈潜することもあるだろう。また、失敗した実験から意外な新事実が明らかになり、それが新たな仮説の創出につながることもあるだろう。より詳しい議論のためにはこれらの点も当然考慮すべきであろうが、にもかかわらず、上の対比は基本的に有効であると考え

たい。たとえば、他の領域の協力の結果はたいてい、当該専門領域の高度化か、あるいは両者の統合による新たな領域の創出に至る。1つの専門領域に沈潜していた探求者は、やがて他の場所へと遍歴を重ねていくだろう。実験の失敗はあくまで一つの挿話に過ぎず、専門領域で最終的に評価されるのはやはり、新たに得られた成果であるにちがいない。このように「教養」と「専門」は、個々の事例を詳しく観察すれば相互嵌入的でありつつも、それぞれの特徴は明確に異なっていると言えよう。

最後に、「専門」的アプローチと「教養」的アプローチがどのように異なりうるのかを例示するために、ローベルト・シューマンのピアノ曲《クライスレリアーナ》作品16（1838年作曲）に対するアプローチを取りあげてみよう。「専門」的アプローチとしては、音楽大学のピアノ科の学生を例にあげる。彼あるいは彼女の望みは、もちろんコンサート・ピアニストになることだ。そのために通過すべきコンクールに向けて《クライスレリアーナ》を準備中なのであるが、この難曲をプロとして評価される演奏にまで到達させるにはかなりの練習が必要だ。かくして彼あるいは彼女は毎日、技術的鍛錬に加えて、《クライスレリアーナ》の練習に明け暮れる。コンクールで優秀な成績を得て、首尾よくコンサート・ピアニストになれたとしても、それは出発点に過ぎない。彼あるいは彼女には、他のピアニストとの競争が、そしてCDに残された過去の名演奏との対決が待っているのだ。

27♦

「教養」的アプローチの例としては、私自身の《クライスレリアーナ》をめぐる遍歴の経験をあげる。高校生の時からの練習の積み重ねで、この曲を自分のために、あるいは親しい人々のために心をこめて演奏することは可能である。やがて大人になり、英語を読む手ほどきを多少受けた後は、外国で書かれたシューマンについての評伝や作品分析にもアクセスできるようになった。その余勢を駆って、《クライスレリアーナ》を生み出した源の1つであるとされるE.T.A. ホフマンの小説を読んでみると、これがめっぽう面白い。『牡猫ムルの人生観』や「砂男」に手を出し、中でも後者には魅了され、さらに他のドイツ・ロマン派の作家たちの作品にも出会うことになった。ホフマンの小説を経由して、「コッペリア」や「くるみ割り人形」といったバレエの魅力も知った。一方、自分でもシューマネスクなピアノ小品を作曲してみると、シューマンのピアノ曲の様式が地下水脈のごとく、多くの作曲家たちの書きぶりに浸透していることも感じた。

両者のアプローチの優劣を論ずるつもりはない。ただし大学教育という場を考えるなら、両者のアプローチに内在するリスクについても考えておかなければ無責任だろう。たとえば、「教養」的アプローチには、一種の根無し草になるリスクが伴う。これを最小化するには、「専門」的アプローチをとる何らかのコース

との組み合わせが有効だ。多くの大学で取られてきた常識的な対処法であろうが、これによって「教養」的アプローチのリスクは減らすことができる。

より真剣に考えなくてはならないのは、「専門」的アプローチのみで進んだとして、結果が報われないかもしれないリスクであろう。たとえば仮に、先ほどの音楽大学の学生がコンサート・ピアニストになれなかった場合にはどうするのか。社会・経済的要因によってコンサート・ピアニストの需要が減退するか、あるいは供給が飽和状態となり、職業として成立しない場合にはどうするのか。しかも彼あるいは彼女には、高度なピアノの演奏技術を除けば、身に着いたものはないのだ。このように考えてみると、やはり落ち着くべきは上記の常識的な対処法しかないと思うのだが、いかがだろうか。